

うまくいくかな

大森史郎

【一】

「お父さん！ お酒飲みながら、何考えてるの？」

塾から戻った長女の福江が声を掛けた。テーブルに左肘を付き、その手の握り拳に顎を載せて身じろぎもしなかった山谷の思考が中断した。

「あのね！ 今日、塾で英語の先生が、回文というのを教えてくれたの。私が答を言う前に、お父さん、考えてみて！」

「かいぶん？」

「うん。どんな字を書くのか言ってしまうとヒントになるので、今は教えません」

「難しそうだな。まあ、考えてもいいよ」

「まあ、なんて。ちゃんと考えてよ！ いいですね！ じゃー、行きます。 “人類が最初に発した言葉” を英語で言ってください」

英語の得意な中三らしい設問だった。しかし、山谷にはさっぱり見当がつかない。高校時代も、英語はどちらかというと苦手だったし、卒業してからの二十数年間、殆ど英文に触れたことのない男にとって、それは土台無理な注文だった。

分からないよ……と、にべもなく言うのも可哀相で、暫く考える振りをした。

「英語で、“こんにちわ”とでも言ったのかな」

「お父さんの、全然面白くないわ。回文にもなってないし」

「難問だよ、福江。答を教えて頂戴」

「駄目なのー？ じゃー、ヒントを差し上げます。最初的人类は、ご存じのように、エデンの園のアダムとイブです。どう？」

そう言われても、答の糸口すら掴めない。

「降参だ。分からないよ」

「じゃー、答を教えるから、ユニバーサル・スタジオに連れていってくれる？」

「また、おねだりか。あそこは動きの激しい乗り物が多いんや。一回行ったら、もういいや……と言う人も多いそうだ。面白いかどうか、分からないよ」

「私、E Tの乗り物に乗りたいし、ジョーズやウォーター・ワールドも是非見たいの」

「そのイー・ティというのは何のことだい？」

「総務課の係長さんがE Tを知らなかったら、時代に遅れるわよ。映画のビデオで観たんやけど、“宇宙人”と訳しているわ」

「ふーん……。まあ、その内に連れてってやるわ。じゃー早く、人類最初の英語の言葉は何か、教えておくれ」

山谷には、回文などどうでもよかったが、娘の知識欲を満足させ、意欲付けする気持からそう言った。

「いいですか！ 人類最初の言葉は、アダムがイブに向かって言ったもので、“Madam, I'm Adam”です」

そう言っただけは、鞆からノートを取り出してそれに書き、前からも後ろからも一字づつ丁寧に説明した。

「よくできてるでしょう。“上から読んでも山本山、下から読んでも山本山”っていうコマースヤルが昔あったらしいけど、それと一緒に

逆さに見ても、コンマの具合まで立派に同じ文章が出来るの。これが回文というんです。“回る文”と書きま

す」

山谷は、目を丸くした。

「へエー、うまく出来てるね……。まさにこれこそ、怪しい方の“怪文”だ」

「さぶー……」

そう言いながら肩をすくめたが、父親が知らなかったことを披露してきた満足感で、顔はニコニコしている。

「夜、お母さんに質問するから、答は黙っててね。今から宿題するわ。」

お父さん、お邪魔しました。じゃーね」

白いブラウスに紺のスカート姿の福江は、黄土色ズック製の鞆を左手に持ち、建築後三年でまだ木の香も爽やかな階段を、トントンと上がって行った。

【二】

山谷雄二は、山下機械株式会社本社総務課の庶務係長で、四十二歳、高卒。山下機械には、父方の伯父のコネで入った。それ以来二十数年間、生真面目に勤め、その限りでは会社から評価されている。

三年前まで彼は、通勤時間が三十分ほどの社宅に住んでいた。築後四十年になるうかという木造平屋建で、二軒長屋だった。古くて狭くて見栄えは良くないが、庭がやや広いのと、会社に近いことが取柄だった。それと比べて、今の家は西播磨の田園地帯にあり、通勤に一時半はたっぷり掛かる。

その頃、先輩や同僚がほとんど社宅を出ていくのを見て、彼は考えた。

四十歳にもならないで、一寸早いかな

しかし結局は、土地付きの建て売りを手に入れた。四LDKだ。この新居は、敷地が百平米ほどで、延床面積は約八十五平米の二階建。下は、寝室にしている六畳の和室とリビング・ダイニング、あとはコーディネート。上は三間あって、子供部屋として和洋一間ずつを充て、あとの洋室は彼の書斎にしている。子供は三人とも女。福江には洋室を与え、下の二人には共同で和室を使わせている。

彼は、漠然と考えている。

子供が大きくなったら、いずれは一間ずつ与える必要がある。そのときは、オレの書斎を、下のリビングの隅にでも移せばいい家を買う際、ある人は次のように考える。

……最初は三LDKぐらいにして、子供たちが大きくなってから広いの買い換える。

しかし、ある人はこう考える。

……子供たちが成長した段階で広い所に移っても、彼らはそう長くない内に独立して出ていくんだから、どうせ買うなら、子供が小さい

ときにその後の成長を考えて、少々無理をしても広い家にする方が合理的だ。

いずれにしても、これらは計画性のある人々の考え方だ。しかし、山谷は計画性に乏しかった。家を買ったのは、皆が社宅を出ていくから自分もそうしたいということだった。四LDKにしたのは、彼の性格の意外な一面である“見栄っ張り”のためだった。

価格は、三千五百万円。自己資金は三百万円で、銀行ローンが三千二百万円。二十五年返済で、毎月十四万円近い額だ。

彼は、長期的な計画性には極めて弱い。目先の細かさはある。一戸建てを手に入れるに当たって行った彼の試算は、次のようだった。

収入は、月給が税込みで四十万円、税金・社会保険料を引いて手取り三十五万円。ローンの返済が十四万円だから、二十一万円が毎月の生活費となる。

従来のも月の出費は、光熱費・新聞代・電話代・教育費・医療費で六万円、食費が十一万円、被服費・交際費等で三万円の計二十万円、彼の小遣い（含む昼食費）で四万円、合

計で二十四万円だ。だから今後は、家庭の生活費を一万円ほど切り詰めるほか、彼の小遣も半分の二万円にしなければならない。月給以外に、夏・冬に各々八十万円ほどボーナスが出るが、季節的出費以外はすべて、万に備えてのボーナス貯金となる。

ローンを少なくするために、自己資金をそこそこ貯める必要があったのに、そうしない内に踏み切ってしまったのは、まさに計画性の弱い山谷的な行動だった。

住居部分は大分広くなったが、庭は狭くなった。

まあ、いいじゃないの

彼は竹が好きだ。猫の額ほどの庭に一抱えの唐竹を植えて、暇さえあれば眺めている。楽しみのもう一つは酒だ。腰を据えて飲めば一升もいける口だが、休みの日、独りで竹を

眺めながら、簡単な“あて”でチビチビ飲むのが好きなのだ。雰囲気飲むというのか、銚子一、二本の酒に陶然として、深みのない思索の翼を拡げるのが常だった。

家を買うとき、山下機械を紹介してくれた伯父の亮吉にはひとつ言も相談しなかった。話せば説教されるのが目に見えていたからだ。辛口の小言が多い人で、役に立つことを言ってくれるのだが、長々とした説教にはこつちがしんどくなってしまふ。案の定、あとで知って亮吉は、

「なんて思慮のないことをするんだ」

と呟いたそうだが、もう後の祭だった。しかしながら、伯父の心配が現実のものになるまでに、大して時間は掛からなかった。実は、一年程前に激変が起きたのだ。

先程、福江が帰宅したとき、山谷が考え込んでいたのは、まさにカネのことだった。しかし、いくら考えても良い智慧は浮かばず、まさに回文のように堂々巡りだった。

自分の家を持つに当たって、山谷には二つの大きな失敗があった。

一つは、収入が激減するのを、まったく読めなかったことだ。

ここ二年ぐらい前から、山下機械の経営がおかしくなってきたのだ。

期の赤字が続いている。同族企業であり、ワンマンの山下社長は、

「わが社は、絶対に潰れない」と言いながらも、

「皆で痛みを分かち合おう」

と、去年の四月から、月給を全社員一律に一割カットし、ボーナスも暫くは従来の半分という方針を発表し、強引にそれを実行している。労働組合はあっても、それを跳ね返すことはできなかった。

「嫌なら、会社を辞める」

ということになってしまふ。

税込み月収は三十六万円、手取りは三十二万円ほどとなり、以前と比べて手取りが月々三万円もの減少だ。しかも、夏冬のボーナスが半分だ。即ち、山谷の税込み年収は、六百四十万円から五百五十万円ほどに激減した。

もう一つの失敗は、家族の心構えが十分に出来ていなかったことだ。マイホームの購入を、山谷のいわば思いつきで無理矢理押し進めたからだ。その頃、妻の輝子は反対して言ったものだ。

「中々計算通りにはいかないものよ。教育費だとか交際費だとかに、

思わぬ出費が嵩みます。そんなに借金して、ローンの返済が大変ですよ」

そのときは、いろいろ説明し、宥めたりすかしたりしてなんとか納得させた積りだった。ところが、予想もしなかった収入の激減で、先々が心細いという逼迫感が、輝子の胸を締め付ける。いろいろな不満が口を突いて出てくる。家族が大病でもしたら大変だ、会社社が潰れでもしたらどうしよう、と彼女の不安感はとめどもなく広がってくる。気持ちの上で、どうにもこうにも救いが無い。

こんな状態の中で、輝子は、一日一日気持を張り詰めて過ごしてきたが、この頃は、なんとなく疲れ果てた感じだ。ストレスに負けた状態なのだろう。元来、彼女は几帳面な性格で、融通性に欠け、口数の少ない女だった。お喋り女は物議を醸すがその修復も早い。無口の間は、トラブルを積極的には起こさないが、意思疎通を欠き易く、一旦欠くと中々埋め合わせが出来ない。

山谷と輝子は、暫く前から口喧嘩が多くなった。ほんの些細なことが発端だが、お互いに辛抱がなくなっている。家計の窮屈さが遠因であることは、はつきりしている。

「貴方が私たちに十分相談しないで、高い買物をするからいけないんだわ」

輝子は、二言目にはそう言った。

「私も福江たちも、みんな耐乏生活をしているのよ」

「うるさいな！ オレだって、小遣を減らして頑張っているんだ。お前たち、あんなボロの社宅から、こんなきれいな家に住めるようになったんだ。一々文句言うな」

とどの詰まりの決まり文句だった。

「こんなにハラハラするくらいなら、社宅でのんびりしていた方が、なんぼ良かったですか
知れないわ」

輝子も言うだけ言うと、キューツと奥歯を噛んで、堅い表情で押し黙る。彫りの深い細面が、血の通わぬ彫像のようになる。

最初の内は子供のいないところでの言い争いだったが、この頃は辺りお構いなしだ。

「隣近所や親戚とのつきあひも、満足に出来ないわ」

「それをうまくやるのが、女房の腕じゃーないのか？」

「太田さんのご主人は銀行の支店長代理で、年収は九百万円を越すそうよ。そういう人なら、高い買い物もいいわ」

「他人のこと、関係ないじゃーないか。オレだって、中堅企業でこの年頃ではそこその給料だ。悪いことでもしない限り、これ以上持つてくるなんて絶対無理だ。努力すればできることならいくらでも言ってくれ。しかし、できないことを要求するな！」

幸い、福江が、子供にしては中々の調整上手で、

「まあまあ、お父さんもお母さんも、子供の前でみっともないわ。皆、辛抱してやっていきましょうよ。私も早く働いて、家計を楽にするからね」

などと、大人顔負けの執り成しをする。

【三】

ある金曜日。会議やひっきりなしの来客に多忙な時を過ごし、部屋に帰ってきたらもう終業の時間だった。次の月曜日の段取のため二時間ほど残業し、大阪駅から新快速に乗った。幸い座れた。目をつむると、

「どうやったら、まとまったカネを手に入れることができるかなあ

思考力が鈍った頭でとると考えると、明確な答えは出ない。

「失礼ですが、山谷さんじゃーありませんか？」

我にかえって見上げると、座席の右手通路に立っている男がニコニコ笑っている。どこかで見えた顔だと思っていると、

「やっぱり山谷さんですね。花村ですよ、高校時代に一年後輩で同じ俳句のクラブに所属していた」

「やあ、失礼しました。花村君！ 久し振りだね。高校を出てから初めてだよ」

「ええ。で、山谷さんは、確か山下機械でしたね。そうだ、そのバツジは山下機械だ」

「よく知ってるね」

「私は菱田商事に勤めているんですが、この一月から大阪勤務になり、

山谷さんの会社には、取引の関係で時々お邪魔するんです」

「そうなの。花村君はK大出身でしたね。高校時代から秀才だったから」

「そんなことはありませんよ……。そうだ！ まだ七時半を回ったばかりだし、もしお差支えなければ、一杯如何ですか？ 久し振りだし、山下機械さんにはいつもお世話になっていきますので、今夜は私が奢らせていただきます」

「後輩に奢ってもらう訳にはいかないが……。よし、二十数年振りの再会だ。一杯やりながら、積もる話をしよう」

電車は、神戸の三宮駅に滑り込んだ。一人はそこで降りた。山谷は、少し遅くなることを携帯で輝子に連絡した。

四月上旬にしては、暖か過ぎる晩だった。街には人が大勢出ていた。五、六分歩いただろうか、花村が案内したのは、居酒屋の『N』だった。ここなら、山谷のよく来る店だ。

山谷にテーブルの上座を勧めた花村は、

「先程は失礼しました」

こう言うと、明るいベージュ色の背広の内ポケットから名刺入れを取り出し、一枚抜き取って改まったポーズで差し出した。そこには、『菱田商事株式会社 大阪産業機械部 第一課長 花村寿正』の文字が躍っていた。

山谷も畏まった姿勢でそれを受け取ると、古ぼけた定期入れの中に挟んでいた名刺を抜き出し、貰った他人のものではないかどうかを確かめてから、少し引け目を感じる仕草で花村に渡した。

『山下機械株式会社 総務部総務課 庶務係長 山谷雄二』を一瞥した花村は、

「庶務の仕事は、気骨が折れるでしょう」

と、外交辞令的に言って名刺入れに仕舞いかけたが、

「そう、総務部長は前田さんでしたね、親分肌の。前田部長はよく存じ上げていますよ。あの方が東京で購買の次長さんをしておられた時に、私、売り込みの担当者でお世話になったんです。随分可愛がっていただきました。今度いつか、先輩との関係を話しておきますよ」

と、したり顔で言った。“先輩”と言い出したことの裏には、社会

的地位での逆転に対する配慮があるのだろうか。

「先ず、枝豆で生ビールは如何ですか？」

「うん、それでいこう」

花村はウエイトレスに、生中二つと枝豆を注文した。

「山下機械さんも、建設・造船両業界の不振の影響をもろに受けて、主力製品の×××がさっぱり売れないようで、大変ですね」

「うん。十四、五年前、会社の幹部は、好景気がまだまだ続くものと思っていたらしく、今ならバブルが弾けた後だと分かる時期に、増産のための大幅な設備投資をやったんだ。それも大きな重荷になってね」

ジョッキをカチッと合わせて乾杯したあと、二人の会話は、国内景気からプロ野球へ、さらに花村お得意の海外経済状況へと移り、続いてオリンピックへと尽きなかった。俳句の話は申し訳程度にしか出なかった。

「ところで」

と、花村が言った。

「先輩は、競馬をやりますか？」

「いや、全然やったことがないよ」

と、山谷は興味なさそうに答えた。

「あれは中々エキサイティングですよ。ダービーとか天皇賞とかいう言葉を聞かれたことがあるでしょう？」

と花村は、しつこいばかりに競馬の話が続けた。顧客に話題を押し売りするのは、商社マンのマナーに反するとして戒められているが、クラブの先輩後輩ということで、口が軽くなっているのだろう。

「その程度のことなら聞いたことがあるけど、内容はさっぱり分からないよ。花村君は大分興味があるようだけど、よく行くの？」

「はい、大好きです。東京勤務の時は、中山競馬場へ通いました」

待ってましたとばかりに、目を輝かせながらの答えだった。

「馬券を買うの？」

「勿論です。そして、割によく当たります」

「秘訣があるの？」

「はい。レースの前日、新聞を買って、専門家の予想を一通り頭に入れます。その上で、自分なりの判断を加えて腹案をたてます。」

当日、競馬場へ行ったら、各レースの前にパドックと呼ばれる下見場で馬の様子を観察し、腹案の確認あるいは修正を行います。場内の方々に設けられているディスプレイ画面で、人気の具合も調べたあと馬券を買うんです。だから、私が馬券を買うのは、レース開始十五分位前が多いんです。

大きなレースでは、七種類の馬券が発売されるんですが、私は馬単をメインにして、大きなリスクをヘッジするためにワイドも買います。

馬単というのは、馬の一着、二着を着順通りに馬番で当てるもの、ワイドというのは、一着から三着までに入る馬の内の二頭の組み合わせを馬番で当てるものです」

身乗り出して、花村は一気に喋った。

「そんな風に慎重にやれば、誰でも当たる確率は高いのかなあ」

「調査は慎重にやって、あとはその人の方針如何です。」

大穴を当ててやろうと思えば、人気の低い馬を買うことになるので、当たる確率は非常に低い訳です。ある意味では、ハップニングを待っている訳です。しかし、当たれば、何十倍の配当金を手にすることができます。百倍を越すこともありますよ。万馬券というやつです。百円券に対して一万円台の払い戻しという意味です。

逆に、堅めに確実にいく場合は、本命・対抗と呼ばれている二頭の有力馬の組み合わせで買っておいて、数倍の払戻金をカッチリと取ってゆくのですね。

さつき、ダービーとか天皇賞とか言いましたが、そんな大レースではなく、名もないレースで確実に小遣い稼ぎをしている人も結構いますよ」

と、乗ってきた花村だ。

“小遣い稼ぎ”という言葉が山谷の心を捉えたが、そんな山谷の気持ちを知る由もない花村は、レース中の馬のように、勢い込んで喋り続けた。

「一つのレースは、二分かそこで終わってしまうんですが、出走直前のゲートインあたりの緊張感が何とも言えませんし、ゴール寸前の


競り合いは、勿論凄い迫力です。ギャンブルとしてよりも、競馬そのものを楽しもうと思えば、本命を買っておいて、ゴール寸前のデッドヒートを味わうべきでしょうね」

山谷に何とか関心を持ってもらいたい花村だった。
「仕組みがよく分からないが、競馬もそんなに危ないものじゃないんだね」

「競馬は商品相場と同じように極めて投機色の強いものだ、という誤った観念が一般に広がっているようですが、そんなことはありません。小豆相場などは、素人が手を出すと危ない要素が沢山ありますが、競馬は大丈夫です。」

商品や株式に比べると、競馬は実際に馬が走るのだし、競馬場では走る前の下見で馬の調子を観察できますから、現実的な予測ができます。さらに、本命買いをしておけば大きく間違ふことはまずないでしょう」

「競馬って年中やっているの？」

かなり心を動かされた様子の山谷に、
「ええ、と呼ばれる一流のレースは、特に東京や関西では夏の暑い盛りを除いて殆ど毎月、土曜日、日曜日を使って行われます。」

この辺りで一番有名なのは、阪急電車の仁川にある阪神競馬場です。どうでしょう、近い内にご一緒しませんか？」

「うん……。今度君はいつ行くの？」

まだ迷いながら山谷が聞くと、花村は上着の内ポケットから手帳を取り出してめくっていたが、

「今週末は、私、別の予定があります。来週の土曜日には行く積もりになっていますので、どうです、是非ご一緒しましょうよ」

「そこまで言うんなら、じゃー、お願いします」

「では、四月×日、朝十時に、阪急西宮北口の二階コンコースでお待ちしています」

それを、山谷も花村も手帳に書き込んだ。

明け方まで丸一日降り続いていた雨もようやく上がり、時折、薄日が洩れていた。

山谷と花村は、西宮北口から宝塚行きに乗った。新聞を小さく折り畳んで、赤鉛筆で何やら印をつけている人が何人もいる。

「各レースの勝馬予想をしているんです」

小声で花村が言った。

「競馬専門の新聞があるの？」

「ええ、専門紙として数種類あります。『競馬ブック』『競馬ニユース』『競馬ニホン』などが代表的なものです。この他、普通のスポーツ新聞にも予想が載っています。」

普通のスポーツ紙は百二十円なのに、専門紙は四百十円と随分高いんですが、競馬場に来る人が買うのは専門紙が圧倒的に多いようです。そこには、専門家による勝馬予想の他に、その馬のベストタイムなど過去の情報が沢山載っているからです」

電車は、三つ目の仁川に着いた。

若いカップルがそこそこ目に付いた。子供を伴った家族連れも結構いた。彼らには、ハイキングに行くような明るさがあった。しかしもう一方に、殺気がメラメラと五体を包んで燃えているような、中年の男たちが何人もいた。野球帽をかぶり、ビニール製のジャンパーを着、比較的細いズボンを穿き、スニーカーかカジュアルシューズ、というのが外形の共通点だ。

競馬場に向かうその男たちの足取りは、速かった。飢えた狼のように、鋭い目付きだった。馬のような体臭を発散させていた。彼らからは、競馬という言葉から連想される、貴族の遊びの雰囲気や牧歌的などかさ、ただの一かけらも見出せなかった。しかし、この男たちを観察した山谷に、違和感はなかった。

カネが欲しいんだな。オレもその一人だ

彼は、内心ニヤリとした。

入場料は二百円だった。驚いた。

ゼロが一つ足りないんとちゃうか？

入場して、山谷はキョロキョロとあたりを見回した。初めての光景を、少しでも目に焼き付けておきたかった。沢山の狼がうるついている。

「物珍しいようですね。あ、暫くしたら第三レースです。取敢えずスタンドに行きましょうか」

と花村が言い、目の前のドーム状の大きな建物を指差した。

二人はスタンドの二階後部に立った。ベンチには、大勢の観客が座っている。スタンドの右手には大きな芝生があり、そこにもビニールの敷物を敷いて沢山の人が座っている。

「ここ数日天気が悪く、今朝も明け方まで雨が降っていたので、馬場の状態は不良です。良い馬でも、馬場不良では力を十分に発揮出来ないことがありますし、普段は大したことがない馬でも、馬場不良を利用してノシ上がってくるのがあります。こんな時は、大穴が出やすいんです」

そして……。山谷にとっては訳が分からぬ内にレースが終わり、レース結果が場内アナウンスされると、大きなドヨメキが湧き起こった。

「じゃー、次のレースに出走する馬を観察しに、パドックへ行きましょう」

花村の頭の中には、今日の案内ルートがきちんと描かれているのだろう。

「次のレース、君なりに予想は立てているんだろう？」

歩きながら山谷が聞くと、

「ええ、立てています。直接馬体を見て、その確認をします。」

先輩！ 馬券を買いましたよ。馬場不良ですが、やはり本命狙いでいきましょう。今度のレースの本命は八番のワカモノゲンキ、対抗は一番のカリスマキングですから、8-1ですよ。私は、カリスマキングよりも六番のコノヨノラクエンを買いたいので、8-6でいきます」

ポケットから『競馬ブック』を取り出して、三面に載っている第四レースの記事を指で示しながら、花村は説明した。

二階から見下ろすパドックでは、次のレースに出走する馬たちが、

厩務員に手綱をとられて一周、二周していた。中の芝生では、騎手たちが、係員の注意事項を聞いていた。二周終わると、今度は騎手が乗っつてもう一周した。花村の言った三頭とも、肌の色艶が良く、お尻が張り、真っ直ぐに首を伸ばしてグイグイ歩いている。

「オッズを見ましよう」

訳の分からない専門用語を使うと、山谷を促して、花村はパドックのすぐ近くで人の群がっている方へ歩き出した。

そこには、ディスプレイ画面に、馬単配当の倍率が表示されていた。それを眺めている男や女の顔は、どれもこれも真剣だった。

「オッズとは、この配当倍率のことです。現在のところ、8 - 1は三・九倍、8 - 6は五・一倍です。この二つの組合せが、他のどれよりも人気が高いんです。買う人が多いから倍率が低いんです」

やがて二人は、馬券売場に来た。花村は、投票カードの該当欄に鉛筆でマークすると、窓口のおばさんに渡し、千円札を二枚出した。花村が受け取った馬券は、電車の切符を大きくしたようなもので、裏面に磁気膜がコーティングされている。山谷も投票カードにマークし、財布から千円札を一枚抜き出しておばさんに渡し、馬券を受け取った。

二人は急いで観覧席に戻った。今度は、スタンド前に広がるコンクリート敷に出て、ゴール真ん前のフェンス際に陣取った。スタート地点では、丁度、大きな赤い旗が振られたところ、コースの思い思いの場所ですっ飛ばしをしていた十六頭の馬は、スタート地点へ向けて集合を開始した。

ゲート付近に馬が揃った頃、場内にジーとベルが鳴り、続いてファンファールが響き渡った。小さな赤旗が振られ、大きな黄色い旗を捧げ持った係員の目の前で、それぞれの馬はゲートインを完了した。途端に扉がサツと開き、一斉にきれいなスタート。ワカモノゲンキがややリードして、二人が見守る目の前を一団となって通過して行った。

遠方の動きはよく判らなかったが、第三コーナー辺りから、馬の姿がはつきり見えてきた。トップは依然ワカモノゲンキだ。そのすぐ後ろに、四、五頭が一団となってひしめいている。ホームストレッチ

に差し掛かると、外側の一頭が飛び出してきた。カリスマキングだ。ワカモノゲンキとの激しい競り合い。二頭を追ってコノヨノラクエンも続く。激しくムチが入る。物凄い地響きだ……。ゴールイン！ 首の差でワカモノゲンキが勝った。二位はカリスマキング。8 - 1だ。

「やったー」

思わず山谷は叫んだ。

「当たりましたね」

と花村が、笑いながら話し掛けた。

「勝ったんだね」

山谷は興奮していた。

「後で纏めてでもいいんですが、勝った実感を味わうために、今すぐ払い戻しを受けに行きましょう」

花村が言った。行く途中でディスプレイを見ると、8 - 1は三・五倍に変わっていた。

「三千五百円の払い戻しだね！」

山谷の声は弾んでいた。

払い戻しは機械でやる。何台かある機械の前には、もう既に数人の列ができていた。この時ばかりは、飢えた狼の目の光は消えて、柔和な仏様ばかりだった。

「もう十一時半です。混まないうちに昼飯にしませんか？ 第五レーヌは大した馬もないし、見なくてもいいでしょう」

パドックの近くの売店で、二人分の弁当と缶ビールを買った花村は、「真ん中の芝生で食べましょう」

こう言うと、先に立った。建物の通路を抜けてスタンドの前に出ると、雲が切れて青空がのぞいていた。右手の方に、下へ降りる階段があった。それは、馬場の下を通って、最も内側にある障害馬場に囲まれた一角に出る通路に続いていた。

芝生は乾いていた。芝生に座ると、二人は缶ビールの栓を開けた。

「先輩！ 初挑戦で初勝利、おめでとうございます。勝利を祝って、乾杯！」

オーバーな花村の言葉も、山谷には嬉しかった。

「ところで先輩、今日は、第十二レースまであります。最終の発走は、夕方の四時二十分

ですが、どの辺までご覧になりますか？」

「折角来たんだから、あと二レースは見たいな。それぞれ千円ずつ買ってみようと思うんだ。花村君の教えてくれた通り、徹底的に本命狙いでいくよ」

「はい。私は適当に穴狙いもします」

結局、その日の戦績は、花村が一万の投資で二万二千円の払戻し、山谷は三千円の投資で六千五百円の払戻しだった。

「よかったですね、先輩」

山谷は、満足気に頷いた。紫色の瑞雲が棚引いた。第三者が見たら、彼の目はガラガラしていたに違いない。

翌日も山谷は、阪神競馬場にやってきた。彼は、昨日一日の実戦で、もう一人前になったような気がしていた。昨夕、最寄りの駅の売店で買った『競馬ブック』で、夜遅くまで研究した。

自分だけの判断で試してみよう

そう思うと、ひよつとして来ているかも知れない花村に見つからないようにしよう、との気持ちが強くなった。辺りを気にしながら、なるべく目立たないようにした。

日曜日の朝、しかも生憎の雨天だというのに、パドックにはかなり大勢の人が集まっていた。白っぽいピンクのソメイヨシノが満開で、詩情を誘う雰囲気だったが、カネの亡者達は、賭けている馬の調子を見極めるのに夢中だった。

今日は、五つのレースに千円ずつ、すべて本命・対抗狙いでやってみよう

堅く行った訳だ。結果は、二勝三敗だった。二千円ほどお釣りがき

た。
「これでいけるぞ！」

山谷は、声に出した。

次の土曜日、山谷が現れたのは京都競馬場だった。と京阪電車を乗り継いで少々遠かったが、ひよっとして花村に会うかも知れない阪神競馬場を避けたのだった。

十万円の現金が、内ポケットにしっかりと納められている。ポータス貯金から、妻の輝子に内緒で下ろしたものだ。二日間の経験ですっかり自信をつけた競馬だったが、こんな大金を密かに賭けることのでぶるぶる震えている。

グズグズしてたら、輝子にばれてしまう。大喧嘩になる。稼いですぐに戻しておこう

そのための努力も十分にした。『競馬ブック』の研究に、三晩も使ったのだ。

今日の方針は、十万円を十等分して一万円ずつ十レースに賭ける。馬単だけにして、七レースは本命と対抗でいき、残りの三レースは穴狙いとする。その穴も、一着の方は本命にする。

悪くても、本命・対抗狙いで二勝し、穴狙いでも一勝は出来るだろうから、十五万円は固い。うまくゆけば、三十万円を超す大金を懐にして帰れるかも

しかし・・・である。

手堅く本命狙いで行った第一レースは、思わぬ穴が出てダメだった。よし、次は当てるぞ！

第二レースも本命を狙った。第四コーナー辺りまでは、いい線だったが、その後がいけなかった。外枠から追い上げられて、山谷が買った馬は二着と三着で、馬券は外れだ。

ワイドにしておいたらよかったな。残念！ うーん、二万円が消えてしまったぞ。

よし、今度のレースで馬単を取れば、お釣りがくる。次も本命狙いだ！

しかし・・・だ。本命と対抗で一、二着を取ったのだが、山谷の予想の3-5ではなく、5-3だったのだ。また、一万円が減った。懐がすこしずつ軽くなってゆく。

今度も本命を狙うぞ。神様、今度こそ頼みます！

とうとう神頼みだ。しかし、第四レースも穴が出て、当たらなかつ

た。

今日は一体どうしたんだろう？ もう帰ろうかな……。いや、今帰ったら、どうやって擦った四万円の穴埋めをするんだ。帰るわけにはいかないぞ

一息置く意味で、早めの昼食にした。建物の中のベンチに座り込んで、コンビニで買ってきた弁当を広げた。一口、二口食ってから、ウエストバックの『競馬ブック』を引っぱり出して、午後のレースの研究を始めた。

“付き”をこちらに向けようと、第六レースは馬券を買わないで観戦だけにした。皮肉なもので、買うなら3 - 1と思っていた通りの結果になった。

オレを、おちよくつていやがる

懐が軽くなつたことに比例して、山谷のテンションは上がってきた。冷静さが失われてきた。

第七レースは、本命・対抗の2 - 4を買った。レースは予想どおりの結果だった。

やつと、元に戻ったぞ。よし！ 景気直しにすぐ換金しよう

払戻機の前に立ってポケットから馬券を取り出し、念のため目を走らせる、何とニ 手の上にあるのは2 - 5ではないか。

何だ、これは？

ガンニ と、鈍器で頭を殴られたようなショックだった。2 - 4を買った積もりが、投票カードのマークミスで、違った馬券を買ってしまった。これだ。

こん畜生！

大きい声を出して、思い切り馬券を引き裂いた。もう一回引き裂いて床に投げ捨てた。頭に血が昇った。次のレースは無茶なまとめ買いだった。当初の冷静な計画は破棄されてしまった。本命に三万円、穴狙いに二万円。有り金全部だった。観覧席最前列の山谷の目は、出走馬の群が見えるゲート付近を睨み付けている。やがてスタート。彼の目は、馬番から離れない。第一コーナー、第二コーナー、第三コーナー、そして第四コーナー。いよいよホームストレッチだ。三番はどうだ？ 七番はどうだ？ 彼の目が動く。山谷は、フェンスにしがみつ

いた。遮られていなかったら、馬場に飛び出していたことだろう。そして、結果は……。ガクツ……と、肩が落ちた。

ダメだ！

十万円は、完全に吹っ飛んだ。

なんちゆうことや！ あんなに研究したのに、全然役に立たなかった。競馬場の違いだろうか……。さあ、十万円の穴埋めをどんな風にするかだ

輝子の鬼の形相が目にはチラつく。三宮までどういう風に帰って来たか、思い出せないほど落ち込んでいた。しかし、暮れかかった街の淡いネオンを見ると、思った。

とにかく一杯飲んで、気分を変えよう

懐には、今月の小遣いの残り一万円強があるだけだった。『N』に入った。客が多かった。山谷は隅っこの二人用のテーブルに腰を下ろすと、菊正と酢ダコを注文した。二、三杯飲んだらどうか、

「お客さん、済みませんが、満席なので相席をお願いできませんか？」

と言うウエイトレスの声に顔を上げると、五十位の、色の浅黒い、インテリ風の、話好きそうだがどこことなく影のある、一人の男が立っていた。

「いいですよ、どうぞ」

「済みません」

山谷の向かいに腰を下ろすと、男は、ウエイトレスに言った。

「白鹿と刺身を下さい」

注文の品は、直ぐに来た。一、二杯飲んでから、男が言った。

「ここには随分おい出になっていますね」

「ほう、よくご存じですね」

と言いながら、山谷は一瞬身構えた。それを無視して男は続けた。

「はい。私も神戸に来たらよく立ち寄るんです。安くて、旨くて、実質的です。で、来るたんび、と言っていていくらい貴方をお見掛けするものですから」

「そうでしたか。私は、まったく気がつきませんでした」

「一杯如何ですか？」

「ご好意は有り難いが、私は菊正をやっていますので」

「あ、これは失礼しました。おねえさん、菊正を一本頂戴！」

男は、ウエイトレスに向かつて言った。

「私には、白鹿、一本！」

山谷も注文した。二人は、注ぎ合った。

「貴方は、山下機械にお勤めですね」

「どうしてそれを？」

大いに訝って、山谷が問い返すと、

「何回かお見かけした時のバッジで判りました」

「そうでしたか。お詳しいですね。貴方もどこか会社にお勤めですか？」

「以前は勤めてましたが、辞めました。その会社における自分の将来に見極めをつけたんです。脱サラと言いましょうか。」

「やっぱり、この世の中、カネです。カネを稼ぐ方法は、色々あります。私は、頭を働かせて稼ぎたい。ギャンブルはリスクが大きいいし、株式は、こちらの意思とは関係なく値段が上下するので、適当ではない。今の世の中、情報です。情報に対する需要は、益々増大します。高度情報化社会です。情報はカネになります」

ここまで言うと、男はじつと山谷の顔を見詰めた。

カネと聞いて、山谷の目が光った。男はそれを見逃さなかった。山谷の心の動きを見通しているような顔付きだった。

「遅くなって失礼しました。私はこういう者です」

男は、名刺を出した。そこには、『インダストリアル・コンサルティング・コーポレーション 代表取締役 都城辰吉』とあった。

初対面の男が十分信用できるかどうか分からないので、山谷は、名刺を切らしていると断って、次のように名乗った。

「山下機械株式会社本社総務課で庶務係長をやっている、山谷雄二です。山と谷、英雄の雄に、ヨコニです。電話番号は 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇です」

都城は、それを手帳に書き留めた。しかし、その手付きは、分かりきっていることを念のため書くような感じだった。

「何かお悩みのように拝見しますが・・・。仕事の悩み、家庭の悩み、カネの悩み、世の中には色々な悩みがあります。失礼ですが、山谷さ

んのは、カネの悩みでしょうか」

「・・・」

「あ、どうも。で、失礼な質問ですが、今の会社でどの辺まで出世来そうですか？」

「せいぜい課長止まりと思います」

「そうですか。ところで、山谷さんは、パソコンはおやりになりますか？」

「ええ、会社では、五年ほど前からやっています。家では、三年前からです。この年頃では、できる方でしょう。でも、すべて日本文や表の作成ばかりですが」

「今の世の中、パソコンは必要不可欠ですね。文章作成と作表で結構です。それじゃー、いつそ会社を辞めて私の仕事を手伝って呉れませんか。現在の年収の一・五倍は保証します。それに、息の長い仕事ですから、一年や二年でハイ、サヨナラ……ということは絶対にありません。どうですか？」

いきなり、凄いいことを言う。

半分身を引きながら、やつとの思いで山谷が口を開く。

「うーん・・・、情報はカネになるとのお話ですが、どんな情報を取り扱っているんですか？」

「会社のお名前からすると、産業界の情報でしょうか？」

一呼吸置いて、都城が答えた。

「はい。キッチンとした経営判断を行うためには、正しい、キーになる情報をタイミングよく入手しなければダメです。」

日本の産業界は、過当競争の状態です。産業機械の業界などは、特にこの傾向が強い。各社は、コンペティターの技術・コスト・販売網などに関する情報を入手することに、躍起となっていますが、中々難しい。周辺情報を集めて、群盲象を撫でるが如く、誤った判断をしています。このあたりに、われわれの活躍する余地があるのです。信用出来る情報と判れば、企業は、こちらの言い値で買い取ります。値段があつてなきが如しですが、当然彼等なりに投資効果は計算しています」

産業スパイ②

思わず山谷の口から、その言葉が洩れそうになったが、かろうじてそれを押し殺した。何となくヤバい気もするが、都城という男の顔を見ている限り、そんなに恐ろしいものだという感じはない。

「山谷さん。私は、貴方のような真面目な人物を助手として求めている。OKされるのなら、支度金として三十万円出しましょう。もしここで承諾されるなら、貴方の身元も確認したし、今日ここで支度金三十万円の小切手をお渡してもよろしいが」

山谷の身体が、小刻みに震えた。

すでにオレのことを調査済みなのかも知れないな

「さつき言いましたように、年収も、山下機械の今の額の一・五倍出しますよ」

都城は、山谷の年収額を確認もせず、大体見当がついてると言わんばかりにさっきの言葉を繰り返すと、もう否応はないだろう、と確信に満ちた表情で山谷の目を見た。

今の山谷にとって、この男の言葉はズシンと応え、説得力があった。カネに縛られ、身動き出来ない現状だ。会社での将来も、大して明るいものではない。

やってみようか

山谷の心は、大きく動いた。

「都城さんの名刺では、会社の所在地が東京になっていますが、お受けすると、私も東京で仕事をするんでしょうか？」

「そうです。なんといつても、東京は、政治的にも、経済的にも、日本の中心です。情報も東京に集中します。但し、必要に応じて地方へ出張していただくことはあります。」

杉並に私が昔手に入れた木造の平屋が一軒有って、部屋が四つあります。私は別のところに住んでいますが、あなたはその杉並に住んでいただきます。そこには、手伝ってくださいているあと二人が生活しています。朝と晩の食事は、賄いのおばさんがやってくれます。

飲物と昼飯以外は全て無料です」

山谷は、承諾した。二人は、こまごましたことを打ち合わせた。銀行渡りの三十万円小切手と、旅費として現金三万円が、山谷に手渡さ

れた。

【六】

翌々週の月曜日、山谷は、いつも出勤する時刻に家を出た。いつもの背広姿で、特に変わったところはなかった。持物も、いつもの鞆だったが、一つだけ違うのは、電気カミソリや歯ブラシの入った洗面袋を、鞆の中に忍ばせていることだった。

最寄りの駅前の郵便ポストに、二通の速達封書を投函した。

一通は、直属上司である新村課長宛のもので、中には退職願が入っており、便箋に“新天地を求めて行きます。長い間のご指導を感謝します。当分、私の行方は探さなくてください。懸案事項は、先週に全部片付けておきました。ご休心ください。また、大した額ではないでしょうが自己都合退職金がいただけるのなら、下記の銀行口座にお振り込みください”と書いておいた。

もう一通は、輝子宛のもので、心配しないようにということ、家は絶対に売るなということ、家族の生活資金は当座の分は貯金で賄っておくようにということ、一カ月経てば毎月送金出来るからなどと書いた。

姫路から、のぞみ号東京行きに乗った。結構混んでいたが、自由席車両に一つ空席を見つけて腰を下ろし、興奮を押し殺すように深呼吸して静かに目をつぶった。

とうとうやった！ 息苦しい環境から逃れ、新規まき直しだ

山谷は武者振るいした。頭の中は、泉のように澄んでいた。彼は手順を復習した。

山下機械は、円満退社したい。退職願は投函した。年功に免じて、自己都合退職を聞き届けて呉れるだろう。

ボーナス預金口座には、先週月曜日に三十万円から十万円を入金しておいた。今月のローン返済も済ませた。

今後の家族の生活費やローン返済は、毎月稼ぐカネで十分に賄える。手元には数万円しかないが、住居費はタダだし食費も昼飯と飲物だけの負担だから、東京でも何とかなる。

さあ、これで洩れはない。万事完璧だ。

思えば、去年の四月に給料カットが実施されて以来の一年間、いろいろ苦労したなあ。しかし・・・、これからは上向きだ。俺の苗字と一緒に、人生、まさに山あり谷ありだ

そんな彼に、次のような天の声は聞こえない。

……人生、山あり谷ありとは、物事を計画しその実現に向けて全力を尽くしても、人智の及ばぬことが原因で浮き沈みがあるということだ。しかし、計画性がなく行き当たりばったりのためにアップダウンしているのは、無策のなせる業であって、山あり谷ありなど

というものではない。お前の先々がどうなるかは、全く保証できないぞ……

： おわり ……